

平成24年度看護研究交流センター活動報告発刊にあたって

著者	関谷 伸一
雑誌名	看護研究交流センター活動報告書
巻	24
ページ	i-i
発行年	2013-04-20
URL	http://hdl.handle.net/10631/1084

巻頭言

平成 24 年度 看護研究交流センター活動報告発刊にあたって

看護研究交流センター長 関谷伸一

平成 24 年度センター事業の幕開けは、5 月 10 日に開催された第 1 回の「看護大いきいきサロン」でした。このときのテーマは「地域リハビリテーションの一環としての在宅療養」で、地元でご活躍の開業医の先生をお招きし、病院から在宅療養までの包括的な地域リハビリテーションの実例についてお話をうかがうことができました。「リハビリテーション」という言葉は現在ではどこでも普通に使われていますが、「地域リハビリテーション」という言葉はまだそれほど普及していないのではないかと思います。日本リハビリテーション病院協会によると「地域リハビリテーションとは、障害のある人々や高齢者およびその家族が住み慣れたところで、そこに住む人々とともに、一生安全に、いきいきとした生活が送れるよう、医療や保健、福祉及び生活にかかわるあらゆる人々や機関・組織がリハビリテーションの立場から協力し合って行う活動のすべてを言う。」と定義づけられています。つまり地域を一つの大きな医療機関としてとらえ、その内容を充実させていくことが重要なことであり、今回のお話では在宅療養をその一環として位置づけているのです。いきいきサロンでのお話をお聞きし、またこの定義を知って、地域リハビリテーションの活動の中で看護が占める役割の重要性をあらためて認識しました。そして、このことはそのまま本センターの役割に置き換えることができるのではないかと思います。例えば、中山間地でありかつ豪雪という課題を抱えた上越地域における高齢者支援システム構築に関しては、本センター開設以来の調査・研究テーマでありましたが、支援システム作りはまさに地域リハビリテーション活動の一つなのです。また、地域で活躍されておられる看護職者への研究支援活動、あるいはその方々と看護大教員との共同研究は、地域への直接的な貢献は少ないかもしれませんが、研究活動を通して、また研究結果そのものが、地域で実践される看護の質を高めていくものと信じています。本センターは看護大学の一組織ではありますが、このように地域という大きな枠組みの中に位置づけられ、その役割を担っていかなければならないと改めて思いました。

このようなことを考えるきっかけになったセンター活動の一つである「いきいきサロン」は、私自身にとっても意義深いものでした。また、本センターが開催しているこのサロンをはじめ各種の公開講座は、地域の皆様と共に医療や健康について考える場であると同時に、貴重な交流とネットワーク構築の場でもあります。私たちはこれからも地域貢献をモットーに、様々な活動を通して、この上越地域に根差したセンター活動を展開していきたいと考えています。

平成 24 年度は、一般市民向けの「いきいきサロン」、「市民公開講座」、そしてフィジカルアセスメントをはじめとする各種の専門職者向けの講座、臨床の場で活躍されておられる医療職者の皆様との共同研究、そして「メディカルグリーンツーリズム」の実施など、多くの活動をやってまいりました。これらの取り組みをこの活動報告の中でご報告し、地域の皆様をはじめ各方面からのご意見ご叱責をいただき、次年度以降の活動の糧に致したいと思います。